

令和 4 年度 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文要旨

現代アートにおける「廃棄された生」

——わずかな光というメタファーに——

美術専攻油画研究領域（油画）

学籍番号 13199906 李偉

急速なグローバル化を背景に、空前の豊かな物質世界が人間によってつくられたと同時に、新たな社会秩序も構築されていた。そこに登場にしたのは、大量消費社会の廃棄物と「余剰人口」と呼ばれる「廃棄された生」である。居場所を失いつつある人間は、「廃棄された生」に当てはまると言える。廃棄物と廃棄された生は、いずれも残酷な競争と新たな秩序に直面している。本研究は、グローバル化・現代化によってライフ・スタイルが激変する中、廃棄された生の表現・歴史・哲学・文化的意義などをめぐる技術や哲学・視覚化等の分野を通じ、わずかな光と人口廃棄物をメインの要素として作品を作り、暗喩することであった。この時代に生きている「廃棄された生」としての人間の存在価値を分析し、自作品の実践を通して考察した。現代アートにある廃棄された生と微光について論じ、新たな視覚的外見および社会学的意義を探究した。

「廃棄された生」という概念は、ジグムント・バウマン（1925-2017）の理論から借用したものであるが、本研究ではただ社会学的な意義ばかりでなく、それを現代アートにおいてどのように表現すべきかを探った。手近にあるものや廃棄物を活用して制作するアーティストは少なくないが、本研究においては、廃棄物そのものに含まれる哲学的思想、及び廃棄物と廃棄された生の関係を考察することを目的としている。

第一章では、廃棄されたものを物質と生き物（人間）の二つの関係から論じた。廃棄物の経済的価値は消失したが、そこに存在する生命の記憶や歴史などの精神は残ることを論じた。そして、生の意義と消失した後の無意義と、その間にある状態こそ廃棄された生の特徴である。廃棄物の発生とアニミズムの角度から考えると、廃棄物と捨てられた生は、いずれも存在価値を認められたり捨てられたり、受け入れられたり排斥されたり、コントロールされたりする。人類による廃棄物の発生とその処理をめぐる課題は、既に一種の文化的現象となり、秩序の構築及び経済の進歩による副作用であり、有用と無用の間に位置するグレー・ゾーンでもある。

第二章では、廃棄されたものとアートとの関係性を論じた。物の利用と廃棄から、人類は運命がもたらす無常と理不尽さに逆らうことが難しいと示されると同時に、我々がいかに生産・製造を行い、さらに生息する環境を描いていくのか、ということも表した。廃棄物にそれなりの歴史があり、その歴史に付着する記憶にも価値は残っている。またその歴史に生命の足跡が残され、時間と情報を蓄積する容器のように、現在進行性の特徴(ongoingness)を持つ。一方、文化をめぐる衝突と捨てられた生命は、社会と政治を反映している。ここでは、廃棄物と物の哲学を研究することで、廃棄物及び廃棄された生を表現するアートの歴史が持つ複雑性を考察し、古今の物事に関する新たな哲学を探求した。

第三章では、過去の自作では廃棄されたものを、どのようにわずかな光と生命から表現、検討してきたのかを論じた。そして、どのように暗喩を利用しつつ、長年の創作の試みを顧みながら、人間の生命が社会においてどのように再構築されるのかなどについて、自分なりの創作理論を考察した。また現代アートにおける廃棄された生の表現とハンナ・アーレントの微光の解釈を通して、インスタレーションとして組み合わせ、捨てられた生をメタファーとして扱った。実際の芸術プロジェクトを通して、生命と微光というテーマ

に対して、さらなる探求を提示した。

第四章では、博士修了制作について「規律社会と抵抗」と「廃棄されたもの」の関係性を論じた。筆者は、現在のコロナ禍によって人々が危機に直面する現状に基づいて、人工廃棄物を素材に、赤外線画像や発光ファイバーを利用して創作を試みた。博士修了制作「微光記念碑」は、廃棄物に新たな社会的な意義を与え、わずなか光「微光」を可視化した。映像とインスタレーションの表現方法を通じて廃棄物と生命、微光と生命のプライドの関係性を検討した。作品の展示を通して廃棄された生に意義と尊厳を与え、さらに希望と敬意をもたらそうと試みた。

アートの役割とは、過度に技術化され乏しく人情に欠けた環境になっていくだろう人類社会に、「どのように微光を利用して星空を作り、生命が自由になれる新たな世界を築き上げるのか」、ということにある。今後コロナの終息に伴い、人は生命を維持するために何をあきらめてきたのか反省しなければならない。芸術の本来は、生命の陰の面や直面する危機に、希望の世界を提示することだと思うからである。これまでの創作経験をエネルギーに新たな表現の展開に向かって、研究活動を引き続きおこなっていく。

本研究の実践成果をもって、コミュニティ間の協力改善や芸術療法、心理学、認知と社会学、人類学、創造力に関する研究、さらにリハビリテーション分野にいささかでも貢献出来ることを願っている。